

魔法の medicine プロジェクト 活動報告書

報告者氏名:勝家 里佳子 所属:長野県飯田養護学校 記録日:2021年 2月 26日

キーワード:本児の実態把握

【本児の情報】

・学年…小学部 6 学年 (重度重複障がいグループ所属)

・障害名…染色体異常、心房中隔欠損症、複合性難聴、気管切開及び常時酸素吸入

・障害と困難の内容

①好きなもの、興味関心のあるものはたくさんありそうだが、本当にそうであるか整理できておらず職員間での共有が難しい。

→本児の実態把握 (好きなモノ・興味関心のあるモノの整理)

②人、ものの区別をしていると思うが主観的であるため、引継ぎ等のために整理したい。

→重度重複障がい児のコミュニケーション (人モノ、場所の区別について)

③気管切開部の人工鼻や気切カニューレを自己抜去してしまう。

→気管切開部の人工鼻や気切カニューレの抜去に対するアプローチ (支援方法の見直し・共有)

【活動目的】

・当初のねらい

①本児には、興味を示すモノとそうでないモノの差が見られる。そうでないモノは、すぐ手放したり投げ捨てたりすることがあるため、好きなモノと関心のないモノとの区別をしていると考えられる。

…本児は、興味関心のある玩具や好みのある感覚・感触のモノを視覚や感覚で感じ、区別して選ぶことができるのではないかと?



本児が興味関心を示すモノと類似したモノや玩具を提示して手渡す、本児に提示してから側に置いておく、本児の周りに置いておくなどといったシチュエーションを設定して、それらに対する本児の反応を整理することで、感覚の幅が広がったり、それらを用いた道具を使って活動したりすることができるのではないかと?

②本児が、かかわりの多い職員や看護師が近づいたり、声をかけたりすると、そちらへ顔や身体を向ける、笑顔になったり手足をバタバタと動かしたりする、背這いや寝返りをうって近づいてくる、といった姿が見られる一方、かかわりの少ない教師や児童生徒から挨拶されたり話しかけられたりすると、真顔になったり体の動きを止めたりする。また、母親や教師に叱られたり、知らない場所へ行ったりすると、悲しそうな表情をしたり泣いてしまうことがある。

…本児は相手の顔や表情、雰囲気を感じ取っているのではないかと?



色々な場面で馴れ親しんだ職員とそうでない職員のかかわりに対してアセスメントすることで、本児がどのように判断して表出したり返答したりしているのか実態把握できるのではないかと?

③本児は一人でいる時間が長くなる、活動に飽きる、身体の動きを抑制される際に、気管カニューレ上部の人工鼻を抜去することがある。学校生活では、人工鼻やカニューレを取らないように職員か学校看護師が必ず本児の近くで見守ったり、どうしても職員が離れる場合は両手に抑制帯を着けたりして過ごす。

…本児の意思に反して動きを止めたり抑制したりすることは、成長を妨げているのではないかと?



本児が好きな遊びや玩具の幅が増えることで、一人で遊びをする時間が増え、人工鼻やカニューレ抜去の頻度が減るのではないかと。(①、②の実践結果を用いて)

- ・実施期間…2020年6月～現在
- ・実施者…勝家里佳子、重度重複障がいグループ小学部職員
- ・実施者と本児の関係…小学部4学年から3年間担任

【活動内容と本児の変化】

・本児の事前の状況(本児の実態に合わせて)

表出

- ・馴れ親しんだ教師や大人を見てニコッと笑う。嬉しかったり楽しかったりすると手足をバタバタと動かす。
- ・声をかけられたり耳元で囁かれたりすると、声がある方へ視線を向ける、身体を向ける。
- ・本児が何かしらの刺激を感じると、身体の動きを止める、5～10秒後刺激を感じた方へ身体を向ける、刺激を感じた所へ手を伸ばして探ろうとする。

理解

- ・人の区別や場所の区別をすることができているだろう。
普段かかわりの無い人に話しかけられた時や行き慣れない場所へ行った時に、身体の動きを止めたり無表情になったりして、表出の減少が見られることが多い。
- ・かかわりのある人の声を認識して、笑ったりそちらへ顔を向けたりする。
- ・環境を整えた場面だと、振動音を感じてそちらの方へ顔を向けたり背這いで移動したりする。
- ・普段と違う場面設定をすると、身体の動きが少なくなる。

感覚

聴覚…混合性難聴であるが、人の声は聞き取っている様子。

補聴器を持っているが、装着してもすぐに外れてしまったり自ら外してしまったりするため、4年の二学期以降は使用していない。

視覚…明暗、人の顔を識別できているだろう。

触覚…固い、振動するモノを好む。

柔らかいモノ、跳ね返る、グニュッとするなど形がとどまらない感触のモノに触れた際は、すぐに手放すことが多い。

身体の動き

- ・背這い、寝返りをする。
- ・目標モノを捉えたりねらいを定めたりして、手を伸ばし握ったり掴んだりする。
- ・好きな教師の側へ背這いや寝返りで近寄る。手を伸ばして教師を引き寄せ抱きつく。
- ・教師や友だちの手を取って自分の頭へ持っていき、トントンと叩く。
- ・定額しているが、仰け反ることがあるためカニューレ部分に刺激が加わってしまうことがある。

・活動の具体的内容

①感覚の実態把握

《目的》本児の好む感覚や刺激の傾向は掴めているが、環境を整えた上でそれぞれの刺激に対してどんな反応を示すの

かアセスメントをし、観察する。

《観察方法》

・興味関心を示すモノ、又は興味関心を示すモノに似たような玩具に対する表出を整理する。

《予想》

・握りやすい大きさのものや振動のあるものはずっと持っているだろう。

《ICT の記録方法》

・iPad でビデオ撮影、本児の様子を日常生活や個別学習内で可能な限り動画で撮影

《環境設定》

・人の出入りが少ない教室を使用する。遮光カーテンを閉めて黒パーテーションで周りを囲う。

・本児が動きやすい仰臥位の姿勢で実施。教室にマットを敷く。

実物の写真を載せます↓

| モノ | 実施回数 | 振動 | 握りやすさ | 手に取って放す時間(平均) |
|--|------|---|--|---------------|
|  <p>電動歯ブラシ</p> | 7 | ○:口の中に入れて、頭に当てたりしていた。 | ○:左右の手で持ち替えていたが、振動が強すぎるのか、一度放すと再び握ることはなかった。 | 2分12秒 |
|  <p>抱っこ</p> | 6 | ○:触れて手を当てたり頭を押し当てたりして振動を感じていた。 | ×:長さが約40cmあり、重さが約1kgあるため、本児にとって大きすぎたのかも。 | 37秒 |
|  <p>スピーカー</p> | 5 | △:音楽が流れている間は、スピーカー部分を耳元に当てていたが、音楽が終わると振動もなくなるため直ぐ放す。 | ×:ボタンを押す→音楽が流れる、因果関係を理解していない様子。たまたまボタンを押し、音楽が流れた際は11秒ほど両手で持っていた。 | 11秒 |
|  <p>洗濯ホース</p> | 7 | △:ホースを噛んだり指で蛇腹部分を引っかいたりして、自ら振動を立てて遊んでいた。 | ○:片手で握れる直径だったため、両手や片手で一定時間握ることができていた。 | 4分7秒 |
|  <p>小型スピーカー</p> | 7 | ○:スピーカー部分を耳に当てたり歯に当てたりしていた。曲調が早い音楽だと、手足をバタバタさせて聴いていた。 | ○:手のひらに収まる大きさ。一曲終わると、一度スピーカーを放したが再び音楽が流れると、スピーカーを手探りで見つけ、耳元へ当てていた。 | 3分54秒 |

| | | | | |
|----------|---|---|---|----------|
| ポンポンライト | 5 | △:ライトを手で叩いた時の振動を感じると、身体の動きを止めていたがすぐに放す。 | ×:ライトに触れて灯りが付くと身体の動きを止めていたが、柔らかい感触だったためか直ぐ放す。 | 42 秒 |
| パイプ付き歯固め | 7 | ○:スイッチを押して振動を感じると、歯固めを噛んだり頭に当てたりしていた。 | ○:持ち手が握りやすいため、両手で持ったり片手に持ち替えたりして握ることができていた。 | 4 分 15 秒 |

《本児の事後の変化と結果》◎…活用できそうな点、●…改善が必要な点

◎「電動歯ブラシ」「抱っこスピーカー」「洗濯ホース」「小型スピーカー」「歯固め」について、一人で長時間(1分以上)遊ぶ姿が見られた。

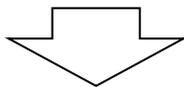
→これらを常時本児の近くに置いておくことで、1つの玩具に飽きても他の玩具に切り替えられたり遊んだりして、一定時間一人で過ごすことができるのではないか。

◎「電動歯ブラシ」「洗濯ホース」「小型スピーカー」「歯固め」について、本児が一定時間握ってられる事が分かった。

→これらの玩具は、持ち運びしやすく本児が握りやすいという視点から、作業学習の補助具に活用することで、本児が主体的に活動に取り組むことができるのではないか。

●「抱っこスピーカー」や「ポンポンライト」について、振動を感じることができて好みの感触ではあったようだが、本児が握りやすいサイズより大きかったためかすぐ手放す姿が多く見られた。

→本児が好む感触(固さ)で興味関心のあるモノや玩具(振動するもの)だとしても、本児が「握りやすいか」ということがポイントだということが分かった。



「振動」に加えて「握りやすさ」「持ちやすさ」を重視したモノ・玩具を活用して実践③(Ⅲ)に取り組む

②認知(顔や場所)の実態把握

《目的》本児が馴れ親んでいる教師とそうでない教師をどう区別しているのか環境を整えた上でそれぞれの刺激に対してどんな反応を示すのかアセスメントをし、観察する。(Ⅰ)

加えて本児が馴れ親しむことができるようになるにはどのようなかかわりをすればよいのか明確にするため、本児へのかかわりを整理する。(Ⅱ)

《観察方法》

(Ⅰ) 馴れ親しんだ教師とそうでない教師と対面した際の本児の様子を記録して整理する。

(Ⅱ) 馴れ親しんでいる・かかわりの多い教師にアンケートを実施し、本児が好むかかわりを整理する。

《記録方法》

(Ⅰ) iPad でビデオ撮影

本児の視界に入らないような位置、定点から本児の様子を撮影

(Ⅱ) 項目立てをしたアンケートを集計

《環境設定》

(I) 黒パーテーションで周りを囲う。

本児の動きをある程度抑制し、顔の位置を固定させるためにバギーに乗った状態で実施する。

本児の目の前が壁になるように設定。

実践(I)

①教師は本児の背後から正面に立つ

②本児の顔から約 30 cm離れた位置でジッと顔を見る

③約 20 秒「Sさん」と名前を呼ぶ

という流れを統一して実施。計 1 分程度。

※教師の背後は黒のパーテーションか何もない壁で実施。基本、この学習の時間だけマスクを外す。

※本児の体力や集中力を考慮して、日/1・2 人と制限して学習する。

※2 学期以降は学習時間を統一し、13:30 頃学習を実施する。



| | 日常のかかわり | ① | ② | ③ | 学習の時間帯本児の体調 |
|------|-------------------------|--------------------|------------------------------|--|-------------------------|
| A 教師 | 少ない、何度か挨拶したことがある程度 | 無表情 | 12 秒後笑う | 無表情 | 昼寝の起床 15 分後 |
| B 教師 | 少ない、授業で 2.3 回一緒に活動した | 無表情 | じっと見つめるが無表情 | 呼名の瞬間、ふっと一度笑う | 昼寝の起床 20 分後 |
| 看護師 | 多い、1 年前から週 3 日程一緒に活動 | 3 秒後ニコッと笑う | 手足をバタバタと動かす | 笑った後むせる | 午後 |
| C 教師 | 多少、所属する学級主任。3 年間一緒 | 無表情 | 徐々に笑顔になる | 呼名の瞬間、手足をバタバタと動かす | 14:00 頃 下校前の時間 |
| D 教師 | 多い、グループ長 6 年間一緒 | すぐ笑顔になり手足をバタバタと動かす | 教師の顔に手を伸ばし、自分の方へ引き寄せようとする | ゲップの様な声を出す、笑顔で手足をバタバタと動かし、むせる | 午後 |
| E 教師 | 多い、グループ教師 昨年度から毎日一緒 | 身体の動きを止めるが無表情 | (マスクを外し忘れていた)マスクを外した瞬間ニコッと笑う | 両手を伸ばして自分の方へ引き寄せる 手足をバタバタさせ、徐々に笑顔になりむせる | 午後 |
| F 教師 | 多少、小学部部長 昨年度一緒に宿泊学習へ行った | 無表情 | じっと見つめ、徐々に笑う | 右手を伸ばし、教師の顔を触ったり自分の方へ引き寄せようとしたりする | 13:30 頃 昼寝の起床後 40 分後 |
| G 教師 | 多い、今年度赴任 6 月から毎日一緒 | 身体に動きを止める | 手足をバタバタと動かす | 呼名の瞬間、ニコッと一度だけ笑い、すぐ目をそらす | 登校後 |

| | | | | | |
|----------------------|--------------------------------------|---------------------------|-----------------------------------|---------------------------------------|--------------|
| H 教師 | 多少、昨年度赴任 訪問教育、授業で 2.3 回一緒に活動する | 手足をバタバ タと動かす | 教師の顔に手を伸ば し、自分の方へ引き寄 せようとする | 呼名しても変わらず教師の顔 に触れて自分の方へ引き寄せ ていた | 11:00 頃(給食前) |
| I 教師 | 少ない、グループ高等 部教師、昨年度赴任 | 無表情 | 教師の顔に手を伸ば して眼鏡をはずす | 呼名の瞬間、手を放して手足を バタバタと動かす | 午後 |
| これ以降、学習時間を 13:30 に統一 | | | | | |
| J 教師 | 多少、所属する学級担 任。3 年間一緒 | 身体の動きを 止める | じっと見つめ、徐々に 笑う | 笑った数秒後手足をバタバタと 動かす | 13:30 頃 |
| K 教師 | 少ない、4 年時週に一 度一緒に活動する | 無表情 | じっと見つめる | 呼名された瞬間ニコッと笑う | |
| 看護師 | 多い、2 年弱一緒に生 活している | じっと見つめ、 徐々に笑う | 笑いながら手足をバ タバタと動かす | 呼名された数秒後、看護師の 方へ手を伸ばす | |
| M 教師 | 少ない、小学部他学年 教師 | 表情を変えず 、上を向く | 身体の動きを一瞬止 めるが、すぐに視線を 戻す | 声のする方へちらっと視線を向 けるが、無表情 | |
| N 教師 | 少ない、所属するクラス の学級担任、今年から 赴任 | 表情を変えず にじっと見つ める | 天井を見る | 無表情 | |
| O 教師 | 多少、グループ中学部 教師、たまに一緒に活 動する | 手足をバタバ タと動かし、 徐々に笑顔 | じっと顔を見てさらに 笑う | 教師に手を伸ばして触ろうとす る | |
| 看護師 | 多い、4 年前から週 3 日 程一緒に活動 | 一瞬ニコッと 笑う | 手足をバタバタと動 かし、むせる | 徐々に笑顔になり、再び手足を バタバタさせる | ↓ |

《本児の事後の変化と結果》◎・・・活用できそうな点、●・・・改善が必要な点

◎学習を重ねるごとに無表情でいる時間が減り、徐々に笑ったり手足をバタバタしたりする姿が見られるようになった。「座位の状態では壁やパーテーションに向かう」→「誰かが突然現れる」という学習内容を理解しつつある様子だった。

◎本児とのかかわりの多さに比例して、笑顔になる・手足をバタバタと動かす・手を伸ばして顔を引き寄せるなどの姿が見られる。

→本児の「手足をバタバタ動かす・手を伸ばして顔を引き寄せる」という行動は、「馴れ親しんでいる」という表出でありそう。今後本児とかかわっていく中で、親しみを表す一つの判断材料になる。

◎前期の学習では、学習の時間帯がバラバラだったため、後期では昼寝をしてから午後の学習に取り組められるように、学習の時間帯を統一した。

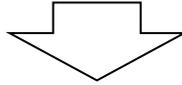
→学習しやすい時間帯を設定したことによって、安定した体調で学習に取り組めた。今後、他の学習も体調に合わせて時間帯を統一することが有効だということが分かった。

◎前期の学習の中で反省として挙がった「声の音量、スピードなどを統一する」ということを後期から実施。支援の統一を

して実践したことで、かかわりに対する本児の表出が明確なモノとなった。

→学習時間帯や支援の統一をすることで、本児の表出をさらに引き出すことができたと考える。

- ほとんどの教師のかかわりに対して名前を呼ばれると、笑顔になったり手足をバタバタと動かしたりする。「Sさん」と呼ばれる→名前を呼ばれている?と理解しているのかは不明。



環境設定や支援の統一をしたことで本児の表出が見られ、その中でも

本児は馴れ親しんでいる相手に「手足をバタバタさせる・手を伸ばして顔を引き寄せる」ことが明確になった

実践(Ⅱ)

日々見られる本児の様々なコミュニケーションが現す姿は、担任である採択者の主観に偏らないよう、教師はどんなかかわりをしているのか、対する本児の表出は何を表しているのか明確にするため、本児が馴れ親しんでいる、またはかかわりの多い教師に、「かかわり」と「表出」の様子についてアンケートを実施。

「どのような場面で(教師の支援)」

「どんな様子だったか」

「その時の姿が現す機能は何か」

移乗の項目を立ててアンケートを集計。協力していただいた教師は9名。

| どのような場面で(教師の支援) | どうした(Sさんの様子) | その姿の機能 | | | | 計 |
|---|--------------------------------------|--------|------|----|---------|---|
| | | 要求 | 注意喚起 | 拒否 | その他 | |
| 近くに行くと/Sさんの髪に触れると | 教師の手を持って頭部に手をもっていき、搔いてほしい場所へ手を持っていく | ○ | | | | 2 |
| 教師がSさんの側から離れたたり「Sさんから離れます」と言う | すばやく人工鼻を取ってしまう/左手(たまに右手)で人工鼻に手をやり、外す | | ○ | | | 3 |
| 「Sさん」と高い声で名前を呼ぶと/1m以内の場所から顔を覗くと/徐々に近づいていく | こちらを見て笑ったり足をバタバタと動かしたりする | ○ | | | | 3 |
| 好きな玩具(ホース)を提示すると | ニコッと笑う、ホースに手を伸ばそうとする | ○ | | | | 1 |
| そっと近づき、笑顔でSさんの顔を覗き込むと/顔をじ〜っと見つめると | こちらに身体を向けて、笑ったり近づいてくる | ○ | | | | 4 |
| 車いすのベルトを外すと | 手足をバタバタと動かす | ○ | | | | 1 |
| トイレコーナーでSさんのズボンを下ろそうとすると | 足を屈伸させてズボンを脱ぐ | | | | ○ | 1 |
| 耳元で囁くように挨拶したり話しかけたりすると | 耳をすまして聞き、笑顔になり、手を伸ばして相手の顔を引き寄せようとする | ○ | | | | 1 |
| 「Sさん」と名前を呼び、「かわいい!」と褒めると | 耳を傾ける様子で、ニコ〜ッと笑顔になる | | | | ○ 受容 | 1 |

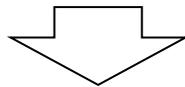
| | | | | | | | |
|-------------------------|-------------|--|--|--|--|---|---|
| 背後からフルネームでリズムに乗って名前を呼ぶと | 後ろを見てニヤ〜とする | | | | | ○ | 1 |
|-------------------------|-------------|--|--|--|--|---|---|

《本児の事後の変化と結果》◎…活用できそうな点、●…改善が必要な点

◎アンケート結果から、「近寄って声をかける」「そっと近づいて顔を覗き込む」「名前を呼ぶ」などの教師の支援に対し、共通して本児が笑顔を見せたり手足をバタバタと動かしたりして嬉しそうな姿を見せる、ということが明らかになった。
→実践Ⅰでも行った「そっと近づいて顔を覗き込む」「名前を呼ぶ」教師のかかわりに対して、その相手に馴れ親しんでいる表出をすることが分かった。

◎結果から分かったかかわりを本児とかかわることが多い教師や看護師内で共有し、日常生活や授業でこのようなかかわりを積極的に取り組むようにした。
→来年度以降での引継ぎとして共有することができそう。

◎対象児が「人工鼻を抜去する」姿は、「注意喚起」を表しているのではないかと考えられる。教師に対する注意喚起行動を学習することができれば、人工鼻抜去の回数も減るのではないか。



「注意喚起」を違う行動や遊びに変換するような学習を取り入れて実践③(Ⅳ)に取り組む

③一人遊びの時間を増やす

《目的》実践①で明確になった本児が好むモノや玩具を使用して、一人遊びをする時間を増やす。(Ⅲ)

さらに、実践②(Ⅱ)から、本児の「注意喚起行動」を違う行動(教師とのかかわり遊び)に変換できるような学習に取り組み、その様子を記録する。(Ⅳ)

《観察方法》

(Ⅲ) 好むモノや玩具を入れた「SさんBOX」を用意し、本児が仰臥位で一人になる時にはそばに置き、様々な玩具で一人遊びをする様子を観察する。

(Ⅳ) 個別学習の時間や一人遊びの時間、VOCAを使って教師を呼んでかかわり遊びをするか観察する。

《記録方法》

(Ⅲ)(Ⅳ) iPadでビデオ撮影

本児の視界に入らないような位置、定点から本児の様子を撮影

(Ⅲ) 「SさんBOX」の中の玩具を一つ取り出し、本児から約30cmの距離で提示する。遊んでいる玩具を放した際、「一度目は再度提示する」「二度目は違うモノを提示する」ようにして観察する。

《環境設定》

(Ⅲ)(Ⅳ) 個別学習の際は黒パーテーションで周りを囲う。

本児の動きを抑制しないように、仰臥位でリラックスした状態のまま実施する。

本児の目の前が壁になるように設定。

実践(Ⅲ)

本児が仰臥位の姿勢でいるすぐ側に「SさんBOX」を置き、その中にある玩具で一人遊びの時間を過ごす。
一度放した玩具でも再度提示したり、違う玩具を提示して継時的選択したりする機会を設けるようにする。

※提示した玩具を発見・掴む・放す姿の一例

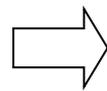
| | | |
|---|--|---|
| <p>小型スピーカー（音無し） 提示後、3秒後すぐ発見</p>  | <p>発見した後、手が伸びて掴む</p>  |  <p>右手で掴み、右耳へ持っていく</p> |
|---|--|---|

提示1度目：発見して3秒後右手を伸ばす

提示2度目：発見した7秒後に再び右手を伸ばして掴む

提示3度目：発見してから約11秒後両手で掴む

提示4度目：発見したが手を伸ばさない、洗濯ホースを提示すると発見した6秒後掴む



小型スピーカーは音無しでも遊ぶ

| | |
|--|--|
| <p>洗濯ホース 提示後、6秒後発見</p>  | <p>発見した後、手が伸びて掴む</p>  |
|--|--|

提示1度目：発見した6秒後右手を伸ばす

提示2度目：発見したが、近くにあった小型スピーカーを見つけて遊び始める

| | |
|--|--|
| <p>手作りマラカス 提示後、発見するがすぐに手は伸びず</p>  | <p>発見した14秒後右手が伸びて掴む</p>  |
|--|--|

提示1度目：発見した14秒後右手を伸ばす

提示2度目：発見した7秒後手を伸ばして掴むが、10秒ほど遊んだ後すぐ放す

提示3度目：視界に入るが、手を伸ばさず、先ほど遊んでいた洗濯ホースを提示すると手を伸ばして遊び始める

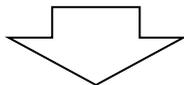
《本児の事後の変化と結果》◎…活用できそうな点、●…改善が必要な点

◎可能な限り本児の学習の様子を撮影して見返すことで、好きなモノや玩具を継時的に選択することができつつあることが分かった。

→「継時的選択」をすることができるよう、他の場面でも本児が選択することができるような機会を設けるよう支援する。

◎動画を見返す中で、ほぼ毎回右手を伸ばしてモノや玩具を掴むことが多かった。利き手があるのではないか。

●右手で掴んだ回数を数値的に整理していないため、右利きという根拠はない。今後、同じようなアセスメントをする際は掴んだ回数やその時の玩具を整理して分析する必要があると感じた。



継時的選択をする場面を設けつつ、利き手があるのかアセスメントをする

実践(Ⅳ)

日常生活の中で、一人になる時間の際に本児から30cmほど離れた所に「先生」と音声を入れたVOCAを用意しておく。基本は、仰臥位のリラックスした姿勢で実践する。

実施期間:11月～

| 時間帯 | VOCA使用時間 | 提示方法 | かかわり方 |
|-----|----------|-----------|--------------------------------|
| 登校後 | 約10分 | 30cm付近に置く | 教師一人が近くで見守り、VOCAを押したらその教師がかかわる |
| 昼休み | 約20分 | // | 数人の教師で見守り、VOCAを押したら近くの教師がかかわる |
| 下校前 | 約15分 | // | // |

※「かかわり方」は、実践②(Ⅱ)アンケート結果を基に、本児の好きなかかわりをする。

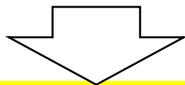
《本児の事後の変化と結果》◎…活用できそうな点、●…改善が必要な点

◎VOCAを掴み、押ししたり噛んだりして音を鳴らしていた。その後、教師が近寄るとそちらを見て笑顔になり手足をバタバタさせる姿が多くみられた。

→実践(Ⅲ)の「SさんBOX」の玩具同様、VOCAを握って遊んだり噛んだりしていると教師が好きなかかわりをしてくれる、という経験を積み重ねることで実践②(Ⅱ)アンケート結果と同じような本児の表出が見られるようになった。

●手持無沙汰になり、人工鼻を外す注意喚起行動をする前に、「VOCAを押す」→「教師が来てくれるだろう」という行動につながっているか明確にはわからなかった。

→注意喚起行動を変換する学習の一つとして取り組む際は、この学習に加えて他の学習にも取り組めるように環境設定する。



「注意喚起行動」の学習を馴れ親しんでいる教師と一緒に取り組む経験を重ねる

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

《かかわる教師でゆっくりみる》

今までは児童が笑顔を見せる活動を表出が出るまで繰り返したり、表出がなくなってしまうたり飽きてきたりする様子が見られたら、他の遊びに切替えたりしていた。今回の実践を通して、報告者の主観だけでなく、本児の様子を関わる教師で共有する機会が増え、本児が刺激を受け取り、どんなことを理解して、そのような表出をしているのか見返すようになった。そして、その表出の一部だけ切り取って「こうなんだ」「この結果につながった」と断定するのではなく、時間をかけて実践し、長い目で本児の成長を多くの職員と見守ることが大切だと感じた。

《馴れ親しむ人を増やすことが大切》

本児の教育課題として、「多くの人に馴れ親しむことができる」「色々な人と安心して活動することができる」ことをねらいとして支援・指導してきた。本児がどのように人や雰囲気を感じ取っているのか、本児がどのようなかかわりを好むのか明確にして共有したり、実践したりすることで以前に比べ本児が馴れ親しむことができる職員が増えてきたが、その一方で馴れ親しんでいる教師と本児が好きな活動に取り組むと、こちらに近寄ったり抱き着いたりする姿が多くみられるようになった。今回の実践を通して、様々な学習を馴れ親しんだ職員と一緒に活動する経験を積むことが、本児の様々な表出を促すことにつながるのではないかと考えた。

・その他エピソード、考察

今回の実践を通して「本児が握りやすいモノや玩具を用いる」「本児の好きなかかわりを共有して馴れ親しんだおとなを増やす」「本児の注意喚起行動を伝える学習を積み重ねる」という学習に加えて、結果から浮上してきた「継時的選択する場面を増やすとどうなるか」「VOCAを使った学習以外に注意喚起行動を伝える学習に取り組めるのではないか」「利き手はどちらの手なのか」などの新たな課題が見えてきた。今後、これらの課題に取り組んでいけるように引き続き周りの職員や学校看護師に協力を得ながら実践をしていきたい。